



イキな味

コロンバンは大変親しみのあるお店であったし、イキな味の店で、日本菓子、ことにアンコに弱い私には第一の行きつけのお店であった。そのせいか現在の孫どもほどの年齢であった私の子供達もコロンバンのお菓子を買って帰ると犬っころの様に喜んだものだ。

多分その印象が深く残っているのだろう。自分で子供をもつ様に成長してしまった娘が、私の所へ来る時お土産にもって来るお菓子はきまっっている。それはコロンバンのお菓子なのである。

多分昭和四、五年の事だったろう。クリスマスの宵に私は子供のために動物の形をした大きなチョコレートをコロンバンで買って銀座の人混みに出た。すると、ひどく酔っぱらった同級生だった鶴田英太郎君に出合った。彼は私の手にもっているものを見つけた。

「おい俺ア子供に何も買って帰るゼエなくしてしまった。お前、蒲田（昔

le 井小 和







松竹キネマ撮影所があり、私は脚本部員だった)でゼニ貰ってるんだから、それをよこせ！」

一所にいた八田元夫君が「よせよ、よせよ」といつていたが、私は、鶴田君の気質をよく知っていたので、「落さないでもって帰れよ」と、それを渡してもう一度コロバンへもどって同じものを買直し、家へ帰った事がある。

鶴田君はあの時の事を忘れてはいなかった。劇作家になり、若くして胃ガンで再起不能になった時も、あの時の事をいつていた。

えんぎが悪い事ばかり書く様だが、先妻が肺炎になった時、私はやはりコロバンへお菓子を買いにいった。「奥さん、どうしたの？」

と丁度レジの所にいた門倉夫人(つまりコロバンのマダム)がいうので「もういけません。二三日の命でしょう」と話したら

「そんな事いうもんじゃないわよ」

と叱られながら何か頂きものをして帰った。が、やはり二日たつて私の先妻は亡くなった。然しコロバンからの頂きものは、たしかに彼女の最後の味になってしまったわけである。

シャンソン歌手のダミアが来日した際、私は彼女に会いに行く時、やはりコロバンのマダムに相談をしてお菓子を作って貰って出かけて行った。すると、ダミヤは、そのお菓子を、「おいしい、すばらしい」と連発しながらいきなり手づかみで三四個たべてしまった。片手には「これを毛がうすくなった所へつけるんだ」とカモジみたいなカツラみたいなものをもち乍ら……ダミヤが仲々いいおバアちゃんである事をコロバンのお菓子で私は発見させて貰った様なものだ。

ストックホルムでその歌を聞いたシャンソンのパタシユーはお菓子屋さんのマダムだそうだが個人的なインタビューはしなかったし、彼女の所のお菓子がどんなのか私は知らない。

門倉さんが銀座に、コロバン・テラスを作った時は私ども大いにフランス風なテラスの発展をのぞんでいたものだが、私みたいに長つ尻の客がいたせいか、日本人気質に合わなかったせいか、長つゞきしなかった事は残念な事だ。

然し、イキな味の分る人なら、甘すぎないコロバンのお菓子を昔から今にかけてやはり愛しているだろうと私は信じている。